

家族とともに より速く

ジャパンパラに出場した津川拓也
11月7日、横浜市、金川雄策撮影



知的障害者水泳 合宿・遠征 重ねた工夫



リオデジャネイロ・パラリンピック水泳に、知的障害がある選手7人が出場する。2012年のロンドン大会は3人だった。家族の支えや選手の発掘が知的障害者水泳の底上げにつながっている。

181センチ、73キロ。津川拓也(24)は、得意の背泳ぎで2度目のパラリンピックに挑む。前回は1000円背泳ぎで6位入賞を果たした。

自閉症で、日常会話はほとんどできない。文字を読んだり書いたりすることはできるが、聞き取って理解するのは難しい。練習でコーチが「水をとらえて」と指示をとばしても、うまく伝わらない。日本知的障害

者水泳連盟は保護者と密に連絡を取り、選手の特徴を把握。きめ細かい指導を心がけ、国際大会への出場回数も増やしてきた。

チームのコーチを務める谷口裕美子さん(47)は「どうやって気持ちのスイッチを入れるかが勝敗を分ける。経験を積むことで、いつも通りの力が発揮できるようにになってきた」と話す。津川の母智江さん(52)は、合宿や遠征の際、朝起

きてやることや荷物の詰め方、「寝る前はお母さんに電話する」などと、一日の流れを図解した表を持たせる。「短い言葉でゆっくり話しかけて下さい」とほか

の選手に読んでもらうための「自己紹介新聞」も配る。智江さんは「使い慣れた言葉ならわかるので、一緒に生活する人に理解してもらえれば」と話す。

連盟のスタッフが地方大会に足を運び、有力選手の

発掘にも力を入れる。リオの代表7人のうち5人は初出場だ。

7月の「ジャパンパラ」。津川は1000円背泳ぎで自己ベストとなる1分3秒10を出し、世界ランキングは3位に上昇した。

8月の最終合宿では、注目選手として報道陣に囲まれた。集まった記者を前に、落ち着いた様子で答えた。「金メダルが取れるように頑張ります」(斎藤寛子)